



ペリフェリ ②



瀬島さんと中曽根さん

日本赤十字社 常任理事 渡邊 芳樹

昔話だが、昭和59年から3年間スウェーデンの日本大使館で書記官をしていた頃、お仕えした越智啓介大使から懇意の瀬島龍三さん(伊藤忠商事相談役)が来るのでお話しするようにと言われた。陸軍大学首席卒で恩賜の軍刀拝受の超エリートであり、陸軍参謀本部員、関東軍参謀、戦後は自身も長くシベリアに抑留された歴史上の人物である。その後、伊藤忠商事嘱託から会長にまで上り詰めた。昭和56年からは第二次臨時行政調査会(土光臨調)委員。臨調の官房長官と称され、中曽根政権のブレーンとして政財界に影響力を持っていた。

スウェーデン来訪時、商務案件は現地伊藤忠商事に委ね、政府関係の視察や会談は日本大使館がお世話した。おそらく私が生涯で出会った最も頭脳明晰な紳士の一人である。発言は実に簡潔で要を得て留学経験のない私でも通訳に困らなかつた。私は随行の合間に厚生省出身で土光臨調が提言した老人医療制度

の見直しに携わったことをお話しした。



欧州の外縁から3年ぶりに帰国した私は間もなく国会内の厚生省政府委員室で国会対策の仕事に就いた。今度は霞が関の外縁に身を置きつつ大臣レクの差配や国会議員や秘書、各政党の院内事務局のお世話仕事を通じた情報業務を2年間続けた。霞が関とは異次元の世界だった。あるとき、中曽根康弘事務所から総理が議員会館の部屋にいるときに話ができると言われた。瀬島さんの御縁かなと推奨した。

実際、中曽根さんと私だけの対談が実現した。話題の詳細は

記憶にないが、出身を問われ、北海道と答えると、「そうか。三井か? 三菱か? それとも住友か?」と問われ、いずれも否定した。「ではどこかの網元か?」と問われ、私は内陸育ちと答えた。「それは済まぬ。では、どこの牧場か?」と重ねて問われた。

私は困惑したが演歌の世界でよくあるように生活破綻し北に逃れた家族の子孫であると正直に答えた。すると驚いたように「君は本当に高文(注…高等文官試験)か?」と問われ、東大法学部卒で上級甲種合格と答えた。そのとき、中曽根さんは驚いた表情で天井を見つめ、「時代が変わったのだな」と息を吐いた。

記憶に残る出会いであった。確かに霞が関には名家の子孫もいる。一方、私はお仕えした大使や先輩たちから何故か北海道出身者らしくないと言われてきた。その度に日本の外縁育ちとして複雑な気持ちになったものだ。